幼小接続・連携に係わるインタビュー
―幼小における「学び」と「育ち」の接続をもとめて―

中井　結貴・長谷部せり・稲川　知美
鈴木　紀子・高根沢伸友・青柳　　宏

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第９号　別刷

2022年8月31日

幼小接続・連携に係わるインタビュー†
―幼小における「学び」と「育ち」の接続をもとめて―

中井　結貴*・長谷部せり**・稲川　知美**
鈴木　紀子***・高根沢伸友****・青柳　　宏*****
宇都宮大学共同教育学部*
宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園**
宇都宮大学共同教育学部附属小学校***
栃木県総合教育センター****
宇都宮大学教育学研究科*****

「小一プロブレム」が機となって「幼小連携」が主張されるようになって既に20年を越えている。しかし、「幼小連携」の本質は、「小一プロブレム」等への「対応」にではなく、幼小にまたがる子ども（幼児）の主体性と学びのあり方を真に接続していくという「課題」に応えていくことにある。本稿における、「幼児教育」を経験して、幼児期の「学び」と「育ち」に目を開かれた教員の生き生きとした語りは、小学校教育を含む学校教育を改革していくための「対話」へと読者を誘うものである。

キーワード：幼小接続・連携、意欲、遊び、学び、育ち

1．はじめに

本稿は、幼小（幼児教育と小学校教育の）接続・連携のより望ましいあり方を探ることを目的として、現職の幼稚園教諭、小学校教諭、指導主事にインタビューを行い、その内容を記載するとともに、その内容について考察を加えたものである。中井結貴（宇都宮大学教育学部4年生）が、長谷部せり（宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園教諭）、稲川知美（同幼稚園・副園長）、鈴木紀子（同小学校・教頭）、高根沢伸友（栃木県総合教育センター幼児教育部・指導主事）にインタビューを行い、その内容について、中井と青柳が考察を加えている。

長谷部は、公立小学校から附属幼稚園に異動してきた教員である。稲川は、公立小学校から附属幼稚園に異動し、その後、公立小学校に異動し、さらにその後、再び附属幼稚園に異動し副園長を務めている。鈴木は、附属小学校教頭を務めているが、附属幼稚園と附属小学校の接続・連携に強い想いと意欲をもって係わってきた。また、鈴木は、自身が附属幼稚園及び附属小学校出身者である。高根沢は、公立小学校から附属幼稚園教諭となり、その後、指導主事となり、幼小接続・連携に係わる研修等を行っている。

以上のように、インタビューの対象となった教員の実践の場は、附属幼稚園・小学校と限定されている。しかし、本稿の記録が示すように、もっとも意義があるのは、公立小学校教員の経験がある者が、幼稚園教員を経験し、その二つの経験を照らし合わ

† Yuki NAKAI*, Seri HASEBE**, Tomomi INAGAWA**, Noriko SUZUKI***, Nobutomo TAKANEZAWA****, Hiroshi AOYAGI*****: Interviews about the Connecting between Child education and Elementary education
Keywords: play, learning,growth
* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University
** Attached Kindergarten, Utsunomiya University
*** Attached Elementary School, Utsunomiya University
**** Tochigi Prefectural Education Center
***** Graduate School of Education, Utsunomiya University
（連絡先：aoyagi@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

せた上で、幼小接続・連携について語っていることである。あるいは、鈴木のように、自身が附属幼・小の出身者として、内側から幼小接続・連携について語っていることである。あるいはまた、高根沢は、小学校・幼稚園での教員経験をふまえた上で、幼小接続・連携に係わる研修を組織する行政の立場からも、幼小接続・連携について語っている。

このように、本稿では、幼稚園、小学校の双方において、長期に渡り教員としての実践を行った者が、自身の経験を誠実に省察しながら、改めて幼小接続・連携について語っている。即ち、本稿の意義は、一人の教員の内側で、幼児教育と小学校教育の双方の経験が蓄積され、その二つの経験を自身で往還しながら、接続・連携の望ましいあり方を誠実に模索した「結論」が、インタビュー内容となっている点にある。

尚、本稿では、「幼小接続・連携」というように、従来の「連携」という言葉の代わりに「接続・連携」という言葉を使っている。「連携」は、具体的には異なる教育機関における教員の連携を指すが、「接続」という言葉を、幼児（子ども）の内面における意欲（主体性）の接続、学びのあり方の接続等を表現する言葉として捉えた上で、「接続・連携」を使用している。

以下、インタビュー内容と、その内容についての中井・青柳の考察を示していきたい。尚、四人に対してインタビューを行ったのは、2021年4月～7月の間であり、対面ないしオンラインによりインタビューを行った。

2. 高根沢伸友（指導主事）に係わるインタビュー内容及び考察

2. 1. インタビュー（2021年7月16日実施）内容

栃木県総合教育センター幼児教育部（幼児教育センター）の高根沢伸友（指導主事）に係わるインタビュー内容（質問、回答）は、以下の通りである。

質問1：小学校教諭としての経験が、幼稚園教諭になった時にどう活かされたか？

（回答）小学校から幼稚園に異動し、戸惑うことが多かった。小学校では必ず授業の中でねらいをもって何を子どもに授業の中で学ばせるか、考えていく。幼稚園の中でも、漠然とただ遊ばせているだけでなく遊びを通してどんなことが育っていくのか、どんなことを経験できるようにしていくのか、考えることができた。「学びの視点」というものを、小学校での経験を通してもっていたことが、幼稚園でも活かされたと感じる点である。また小学校において、授業は言葉で進んでいく。子どもの前に立って、何かを話すときに、子どもに伝わりやすい言葉を選び、どう話したら子どもに分かりやすいかを考えていた。指導者として言葉を意識するということが、小学校での経験が活きていたと感じる。

質問2：幼稚園教諭としての経験を、小学校教諭になった時にどう活かしていきたいか？

（回答）子ども一人一人に応じるということをこれまで以上に考えていきたい。小学校教員の時には、集団作りや全体的な動きを強く、意識していた。小学校に戻って学級経営をする機会があれば、一人一人をよく見る、ということを大事にしていきたい。

小学校教員の時には、学級経営において、ルール作りを何より大切にしていた。例えば、はじめの3日間で学級のルール作りを先生が示すなどして、規律ある集団作りを意識していた。しかしある日、他の先生から、「落ち着いているけれども、あまりエネルギーがない」と言われたことがある。規律ある学級と捉えられるが、子どもたち一人一人が十分に自己発揮をすることができていなかったのではないか、という反省がある。幼稚園などでは、子どもたち一人一人が自分らしく、自分を出して生活をすることを大切にしている。この経験から、小学校教員に戻ったら子どもたち一人一人が自分らしさを発揮することを促しながら、それをうまくコーディネートしていくような学級経営を大切にしていきたい。

質問3：小学校、幼稚園の異なる点はどんなものがあるか？

（回答）一番異なると感じた点は、幼稚園に教科書がないことである。小学校から幼稚園にいったときに一番辛かった点は、やることが決まっていないことである。小学校ではやることが決まっていて、それをどう進めていくかということを常に考えていた。しかし幼稚園には、教育課程があって、その時期に子どもたちのどのような経験を促していくのか、計画性を持って保育をしているが、小学校のように、明確に毎日の活動が決まっていない。日ごろ子どもが興味関心を持っていることと、経験してほ

しいことの狭間で何を行うか、決めていく。このことが大きな違いだと感じ、考えさせられた部分である。

質問4：小学校、幼児教育に携わる教職員の意識は異なるのか？
（回答）個人によって差があるが、小学校の先生方は集団としての落ち着きを意識していると感じる。集団志向が高いと感じている。幼児教育の先生は、一人一人を見取って、いかに一人一人や友達との活動を充実させるか、意識しているように感じている。この意識の違いを、特に幼稚園に異動して感じることが多かった。

質問5：幼児教育、小学校教育の中で繋がっていると感じる点、繋がっていないのではないかと感じる点はどんなことがあるか？
（回答）繋がっていない点は、特にないと考える。すべて繋がっていると考えている。一番繋がっていると感じる点は、「意欲」である。子どもたちの目がキラキラして輝いている姿、そのような意欲を幼児期に育てていくことが大事だと考えている。このことが、小学校の授業の中でも活きてくると実感している。

小学校の中で、先生の言うことをよく聞いて「お利口」にしている子もいるが、実は心が動かずワクワクしていない子も見受けられる。意欲があまり感じられない姿である。幼児期に、遊びの中でその子自身が興味関心をもつことを大切にし、十分に心動かしながら遊ぶ中で様々な経験を重ねていくことが大切ではないかと考える。

協同性の育ちも大切である。一人一人が違っていて友達から刺激を受けることで、自分が豊かになる。こういった協同する経験が、小学校にも繋がっているし、大切な点だと考える。

質問6：小学校教育は、子どもたちが幼児期の経験を活かして学び続けるためにどうあるべきか？
（回答）子どもにとっての必要感を大切にしたい。小学校ではやることが決まっている。何か一つ学びたいこと、授業で押さえたいことがあったとしても、子どもがそこにきちんと気持ちが乗ること、必要感を感じて学習を進めていくことが大切である。子どもの興味関心を大切にし、意識することが大切であると考える。先生がただ課題を出したから学ぶ、ということではなく、学びたくなるような課題を考えること、生活の中にある素朴な問題を授業の中で取り上げるなどといった工夫が大事である。子どもが必要感を感じながら意欲的に取り組むことが、授業の中にたくさんあるといいのではないか、と考えている。

質問7：幼児教育は、小学校教育を見据え、どうあるべきか？
（回答）遊びの中で心を動かし、目的に向かって粘り強く取り組むことが大事である。また、年長の後半には、友達と目的を共通にしながら一緒に達成していく喜びを十分に味わう経験を重ねていくことが大切である。そのことが子どもたちにとっての小学校に向けた、大切な経験になっていくと考えている。いわゆる非認知能力を幼児期に育てていくことが大事である。粘り強く取り組んだり、友達と一緒になって取り組むことを楽しんだり、幼児期の遊びの中で十分に意識していく必要があると考えている。幼稚園などでは、子どもの興味関心に応じた遊びが十分にできるような環境を通した教育を基本として、これをしっかりと行っていくことがこれからも求められることだと考える。

質問8：幼児教育センターの研修に参加された幼児教育機関や小学校の先生方の連携への意識の違いはあるか？
（回答）幼児教育の先生方は、もっと連携の機会が欲しいという声を挙げていることが多い。つないでいく必要感というものが、幼児期側から感じることが多い印象を受ける。私は小学校にいるときに、小学校は小学校として新しく始まるから、幼児期のことはあまり関係ないという思いをもっていたことを反省している。

質問9：幼児教育センターの研修の中で、幼小連携について幼児教育、小学校の先生方がどんな感想をお持ちなのか？
（回答）幼小合同の研修では、小学校の先生方からは、思っていたよりも子どもにできることが多い、という声を聞くことが多い。予想していたよりも幼児期にいろんなことを経験している、思っていたよりも子どもたちができることがいっぱいある、という感

想を持つ先生が多い。

幼児期の先生方からは、小学校の先生方とお話などされる中で、小学校でも幼児期の育ちを踏まえていてくれてありがたいと思った、幼児期のことを小学校側にお伝えすることができて良かった、という感想がある。遊びを通して、幼児期にしっかりと子どもたちを育てなければ、と改めて思ったという感想が多い。

質問10：幼小接続・連携の課題はどんなものか？
（回答）お互いの教育の理解をすることが、まだまだ足りていないと感じている。しかし、特によく低学年をもっている先生など、幼児期のこともある程度分かっている先生も増えてきていると、研修を通して実感している。それでもまだ、幼児期の教育とはこういうものだ、という理解が必要であると感じている。まずは幼児期のことを知ってもらうこと、幼児期の遊びや生活を通して、子どもたちの中に育ってきていることをもっと知ってもらうということが必要であると思っている。

栃木県では、幼児期の施設として、公立以外の私立が非常に多い。幼稚園、保育所、認定こども園と様々な施設がある中で、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂（平成29年）において幼児教育の部分は共通にしていこう、という流れがある。そうではあるが、特に私立に関しては、建学の精神や園長先生の方針など、様々な園がある。幼児期の中での、「横」のつながりが十分でないことが課題として挙げられる。小学校はほとんどが公立であるため、学習指導要領に乗っ取って、どこの小学校もおよそ同じような教育を受けることができている。

幼児期側は園によって、まちまちである、という点が小学校の先生にとっても子どもたちが入学をしてきたときに難しさを感じてしまう点でもあると考えている。

スタートカリキュラムも課題として挙げられる。スタートカリキュラムは、見直しが必要なものである。子どもに合うように見直していくことが必要である。また小学校の先生からよく聞くことが、スタートカリキュラムが学校全体で共通理解がされていない、ということである。低学年の先生は熱心だが、高学年の先生への理解を求めることが難しいという現状もある。

質問11：幼小接続・連携の望ましいあり方とはどんなものか？
（回答）小学校と幼児期側の先生方がお互いに共通理解をすること、（改定された幼稚園教育要領・他で示された）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活かして研修会を行うことが必要であると考える。子どもの育ちをきちんとお互いに理解しあうことができるような研修の場を、市や町の行政側が主催となって、行われる状況になることが大切であると考える。

到達目標ではないが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が現れてくるように、幼児期に子どもをしっかりと育てていくことが大事であると考える。小学校がその姿をきちんと踏まえて、幼児期の育ちを活かした教育が接続期に行われることが大事であると考える。当たり前なのかもしれないが、この当たり前を大切にしていくことが必要である。

2. 2. 高根沢伸友（指導主事）へのインタビューに係わる考察

高根沢伸友指導主事は、小学校から幼稚園へと異動した時に、ねらいや今日やるべきこと、その日に達成すべきことが決まっていないことが、一番異なる点として感じたことだと言う。小学校での教員生活の中で、日々のねらいがある見通しを持った授業形態の経験を経て、「学びの視点」が培われたそうだ。幼稚園に勤務したときも、小学校教員生活の中で培われた「学びの視点」が活かされたと言う。日ごろの子どもの興味関心と、子どもに経験してほしいことの狭間での遊びを考え、遊びの中での学び、ねらいや見通しを考えながら、子どもたちと関わっていたと言う。また、幼稚園では一人一人が自分らしく、自分を出して生活をすることを大切にしている。幼稚園教諭としての経験を、小学校教員に戻ったら、一人一人が自分らしさを発揮しながら、それをうまくコーディネートしていくことを意識していきたい、と言う。

小学校教育において、子どもたちが幼稚園の経験を踏まえて学び続けるためには、子どもにとっての「必要感」が大切、と言う。教師は子どもたちの興味関心がどこにあるのか、常に意識をする必要があるそうだ。子どもにとって学びたい、という意欲や必要感を感じることができることが、授業の中に落ちてくることがたくさんあると良いのではないか、

と言う。

また一方で幼児教育において、小学校教育を見据え、遊びを展開していくためには、遊びの中で心を動かしながら粘り強く取り組む経験や、友達との関わりから協同する経験を通して、いわゆる非認知能力を幼児期に育てていくことが大事であるそうだ。子どもの興味関心に応じた遊びが、十分にできるような環境を整えていくことが、これからも幼児教育の中で求められることだと言う。

幼稚園、小学校の子ども自身の学びの中で特につながっている点は、「意欲」であると言う。幼児期に子どもたちが心動かしながら思いっきり遊ぶ経験を通して、粘り強さを身に付けること、友達との関わりの中で協同する経験が、小学校教育につながっていくと言う。

ここで改めて心に刻みたいと思うのは、高根沢が、質問5（幼児教育、小学校教育の中で繋がっていると感じる点、繋がっていないのではないかと感じる点はどんなことがあるか？）に対して、「すべてが繋がっていると考えている。一番繋がっていると感じる点は、『意欲』である」と答えていることである。一方で、高根沢は、質問2に対する回答の中で、小学校教員をしていた時に、自身のクラスについて、他の教員から「落ち着いているけども、あまりエネルギーがない」と言われ、反省したと語っている。この一連の回答が語っているのは、小学校教員の係わり方によって「子どもはエネルギーがない」状態にもなるが、子どもたちの中には幼小を通して「意欲」が潜在している、ということである。教師が自身の子どもたちとの係わりを反省し、子どもたちの中に潜在する「意欲」を見取ることが、幼小接続でもっとも大切なことである。高根沢はそう語っていると思われる。

ところでまた、幼稚園、小学校の先生方の連携の意識は、幼児教育側のほうがつないでいく必要感を感じ、もっと連携の機会が欲しいという声が多いそうだ。

幼小接続・連携の課題は、小学校、幼稚園等共にお互いの教育の理解が不十分である点だと言う。また幼児期側の課題として、幼稚園、保育所、認定こども園など様々な施設がある中で「横」のつながりが十分でないことが課題として挙げられるそうだ。様々な教育が施される場合があり、園によって異なることがあるため、小学校の先生にとっても子どもたちが入学をしてきたときに難しさを感じてしまう点でもあるそうだ。さらに、小学校教育としてスタートカリキュラムが課題として挙げられるそうだ。小学校全体で、共通理解できるようにし、子どもの実態に合わせて見直していくことが大切と言う。

最後に幼小接続・連携の望ましいあり方とは、小学校、幼稚園共にお互いの教育の共通理解を図ること、「幼児期に終わりまでに育ってほしい姿」を活かして市や町の行政側が主催となって研修会等を行うことが大切である、と言う。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点にして、幼児期は子どもたちをしっかりと育てること、小学校は幼児期に育まれてきたことを踏まえて、教育を行うことが大事であると言う。

3. 鈴木紀子（附属小学校教頭）に係わるインタビュー内容及び考察

3. 1. インタビュー（2021年7月8日実施）内容

宇都宮大学共同教育学部附属小学校教頭である鈴木紀子教諭に係わるインタビュー内容（質問、回答）は以下の通りである。

質問1：宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園と、附属小学校の連携はどのようなものがあるか？

（回答）大学自体で、プロジェクトが始まっている。幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の4つの附属のなかで、1つのまとまりとして連携を行っている。各教科に分かれていて、幼稚園は幼児教育という分野があるが、道徳や生活科なども、幼稚園と小学校で一緒の研究として行われている。

道徳でいうと、12年間を見通して、というテーマで行っている。幼稚園の園児たちの問題意識と、小学生の問題意識、中学生の問題意識がどのように発展していくのか、というところを見ている。去年は幼稚園の年長の先生に、トルストイの童話「七つの星」を読み聞かせをしてもらった。どんな感想を持つのか、という記録をとった。また、1年生に上がった状態で「七つの星」を用いた授業をした。年長の時の感想が、1年生にあがってどのように変化するのか、ということを見る。

生活科は、幼稚園と一番つながりが強い教科だと感じる。4月から5月にかけて「学校だいすき」という単元を行う。「学校だいすき」というのは、附属小学校ってどんなところなのか知る、なかま探し

ゲームをする、学級のことを知る、2年生と一緒に遊ぶ、附属小学校のお気に入りを見つける、学校探検をするなど、学校のことを知る単元である。また附属小学校のお気に入りを見つけたら、友達に紹介をしよう、ということを2か月かけて行っていく。6月になると、「生きものだいすき」という単元に入っていく。生き物を育ててお世話をしたり、調べたりするものである。幼稚園と関わる生活科の授業は、一緒に遊ぶものがある。前庭で、幼稚園の子どもたちと遊ぶ。その時に、遊ぶ内容は1年生が企画をする。4月、5月に行われる。

国語では、1年生に1月から2月ごろにかけて年長さんに小学校のことを教えてあげようというものも、単元の中に入っている。去年はグループになって、それぞれでお掃除について教えてあげよう、とか給食について教えてあげよう、勉強について教えてあげよう、遊びについて教えてあげよう、など小学校のいろいろなことをテーマに選び、情報を整理して、どうやって伝えよう、という練習をする。絵をかいて文字も書いて、実際に幼稚園に行って、発表をして伝えることを行った。

また去年、コロナ禍の中、小学校に上がる不安もあったため附属幼稚園の稲川先生の提案で、幼稚園生の一周旅行が計画立てられた。一周旅行とは、年長児を何グループかに分けて、小学校の校舎をぐるりと一周する、というものであった。中には不安がとても大きい子もいたので、前もって見せるということが良かった。見事に実現することができた。1年生の教室や、トイレ、水道、昇降口など、簡単なことではあるが子どもたちは興味津々で見て、帰っていった。そのような関わりが不安を取り除くことにつながる。改めて、大切だと感じた。一周するだけであったので、電話での打つ合わせを一回しただけであった。そのため、時間に余裕がないなどといった課題はなかった。

小学校のPTAのほうで、委員会がある。小学校1年生にあがった子どもの親を対象にして、おしゃべり会のようなものを開催している。雑談はすごく大切であるので、機会をつくろうということで、開催されている。上の学年の保護者も来てくれて、宿題についてなど先生には聞かないけれども知りたいことを情報交換する場になっている。早期教育が話題にもなっているように、はやく幼児期から学ばせたい、という保護者もいらっしゃるが遊びが学びであることを伝えていくことが大事である。

質問2：幼稚園、小学校それぞれの教師の意識の違いなどはあるか？

（回答）連携の課題とも重なるが、小学校の先生たちは幼稚園の中の子どもの実態をあまり知らない先生方もいる。幼稚園の先生方も、小学校の教科に移行する姿、遊びであった学びがどのように移行していくか、どのように学習していくのか、幼稚園の中だけで過ごしているとあまり見えてこないかもしれないので、交流を深めていきたい。

質問3：附属小学校から見た、幼小接続・連携の課題は？

（回答）カリキュラムの中で幼稚園と小学校、お互いの交流が入っている場合は安定していていいと思うが、カリキュラムに入っていない場合、これから行う場合は時間の確保が一番の課題になってくる。何かイベントを一緒に行うにしても、下準備のお話からたくさんの時間が必要になる。時間の確保、また目的をお互いにどう持っているかを決めることが、難しいと感じる。

保護者の不安として、1年生の保護者から、情報機器とどう付き合っていけばいいかわからない、不安であるという声を聞く。ギガスクール構想で小学校1年生から、1人1台iPadのようなタブレットを持つことになった。幼稚園までは遊びの中で過ごしてきて、そういうものも急に入ってくるのでどう対応したらいいか、子育てをする中でもとても情報が多いため、惑わされてしまう、という声が多い。情報機器の活用、ICT化に伴って教育をどう行っていくのか、幼稚園、小学校の先生方の課題でもあると思っている。

質問4：子どもたちが幼児期の経験を活かして学び続けるために、小学校教育はどうあるべきか？

（回答）幼稚園の教育要領の中でもある通り、身近な環境をすごく大切にしたり、幼児教育の遊びの中で学びがあったり、性格（個性）が広がったり、試行錯誤があったり、思いを巡らせたりする。そのことを幼児教育の先生方が環境を整えながらどんどん発展させていく。小学校に入学するから、小学校だから、と区切ってしまうのでなく、持続させてほしいと強く感じている。子どもだけでなく親も先生方

も、そのことを意識してほしいと思う。

質問5：幼児教育は、小学校を見据えどうあるべきか？
（回答）小学校側からすると、小学校と幼児教育機関と、お互いにお話をする機会をつくりたい。幼児教育機関は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をしっかりと考え、小学校に引き継ぐことが大事である。小学校からは教科カリキュラムになるが、幼児教育における「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をうまく活かしていくことが大事である。友達に嫌なことをしない、人とたくさん関わる、自分で試行錯誤をする、社会性といった基本的なこと、幅広いことを幼稚園では行う。小学校はその幼児期の経験を活かさなければならないと思っている。

質問6：小学校での教師としての経験を、この先もし幼児教育に携わるとしたらどう活かしたいか？
（回答）小学校で活かされることが、幼児期の様々な経験の中でたくさん埋もれている。きちんと拾い上げていきたいと、考えている。年長の後半くらいになると、生活科につながったり国語につながったりするようなことをまとめながら、関わっていきたい。勉強を教える、ということではなく。意識付けをしていきたいと考えている。

質問7：望ましい幼小連携・接続のありかたは？
（回答）1つ目は、先生方がお互いの教育を知ること。2つ目は、保護者も小学校での学びを知っていただき、子育てに活かしてもらいたい。3つ目は、幼児教育と小学校の連携のみならず、幼児教育と中学校の連携なども大切にしていきたい。

幼児教育と中学校でつながっている部分はある。具体的には、中学校は技術と家庭科が入ってくる。その中の家庭分野のほうで、調理や生活のほかに保育が内容として入っている。中学校の三年生が、附属幼稚園に訪問をして、幼稚園児と一緒に遊んだり保育に参加したりしている。幼児と中学生が係わり、互いを知ることには大きな意味がある。それをより意識して、カリキュラムマネジメントなどをしていけたら望ましいのではないか、と考えている。

質問8：鈴木先生ご自身が附属出身で幼稚園、小学校と経験をしている。良かった点、今に活きていると感じることは？
（回答）幼稚園に通っているときは、小学生のお兄さんお姉さんを身近に感じることができた。小学校に上がった時に、不安がなかった。いつもの環境であり、場所が少し変わったくらいの認識であった。安心して過ごすことができた。小学校から中学校に上がっても、小学生の時に当たり前のように中学校の校庭を使っていたので、不安はなかった。すんなりと移行することができた。附属にいると、3年間（幼）、6年間（小）、3年間（中）がなんとなく一体化しているような雰囲気であったため、過ごしやすかった。安心して過ごすことができた。

質問9：幼稚園から小学生にあがるときに、遊びから教科制になるギャップはなかったか？
（回答）幼稚園は、今考えると先生方がすごく遊びに対して意識が高く、自由にやらせてくれていた。先生方がいろんなものを周りに準備をしてくれていたと思う。例えばおままごとをしていて、こんなものがあるといいな、明日にはこれをやってみたいな、と思っていると次の日にはそっと準備がされていた。先生方が観察をしながら、出しすぎず、出さなすぎず、いい按排で環境設定をしてくれていたと感じる。その遊びを、小学校の先生方もすごく大切にしてくれていた。1年生のときはお勉強をした、という意識はあまりなく、また学校に楽しく遊びに行っていたような意識であった。

3. 2. 鈴木紀子（附属小学校教頭）へのインタビューに係わる考察

鈴木紀子教諭は、附属小学校から見た連携の課題を時間の確保が一番の問題である、と言う。お互い忙しい中での時間の確保、また目的をお互いにどう持っているかを決めることが、難しく感じているそうだ。また小学校、幼児教育機関がお互いの教育のことを知ることで、より円滑に連携できると考える。小学校、幼児教育機関というそれぞれの空間で子どもたちと関わる中で、なかなか他の教育機関の教育や現状が見えてこないこともあるのではないかと言う。

小学校教育、幼児教育がお互いに連携した教育として、相互が理解しあうような機会、お話をする機会をつくりたいと言う。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を軸に幼児教育は子どもたちの遊びの

中の学びを展開している。しっかりと「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有し、考え、小学校に引き継ぐことが大事、と言う。小学校からは教科カリキュラムになるが、幼児期の経験を大切にした指導が大事である。小学校教育において、子どもたちが幼児期の経験を活かして学び続けるためには、幼児教育の中での様々な遊びや経験の中から培ってきた意欲や、やってみたいという思い、好奇心などを、小学校だからと分断するのではなく、持続させていくことを意識することが大事であると言う。

また、質問6に対する「小学校で活かされることが、幼児期の様々な経験の中でたくさん埋もれている。…年長の後半くらいになると、生活科につながったり国語につながったりするようなことをまとめながら、関わっていきたい。勉強を教える、ということではなく。意識付けをしていきたいと考えている」という回答も意義深い。これが実現されたら、「経験を知識化していく」ことを、子どもがより実感することが出来るのではないだろうか。

あるいは、鈴木の言うような「意識付け」をすることに違和感を持つ保育者もいるかもしれない。そのような時こそ、自らの「違和感」を語り、対話していくことが求められる。後で語るように、幼小接続・連携は、このような「対話」の中でこそ、よりゆたかなものになっていくと思われる。

最後に幼小接続・連携の望ましい在り方として、3点挙げていた。1点目は、小学校、幼児教育のどちらもの先生方がお互いの教育を知ること。2点目は、保護者も小学校での学びを知っていただき、子育てに活かしてもらうこと。3点目は、幼児教育と小学校の連携のみならず、幼児教育と中学校の連携なども大切にしていくことである。このように、お互いを知ること、幼児期の経験で培ってきた子どもたちの育ちや意欲をカリキュラムマネジメントなどを通して活かしていくことが、望ましい幼小接続・連携につながるのではないか、と言う。

4. 稲川知美（附属幼稚園副園長）に係わるインタビュー内容及び考察

4. 1. インタビュー（2021年4月30日実施）内容

宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園副園長である稲川知美教諭に係わるインタビュー内容（質問、回答）は以下の通りである。

質問1：附属幼稚園と附属小学校における連携はどんなものがあるか？

（回答）文科省においては、幼稚園と小学校が連携をし、接続を共に行っていくこと、教育課程を一緒に考えていくことが大事だといわれている。しかし、一般的には中々そこまでいかないのが実情である。交流活動をすれば良いと考えているところも、少なくない。

附属では、まずは、子ども同士の交流、子どもたちの生活の中で小学校との接点を作ることを行っている。年長の後半の時期、10月ごろ小学校の前庭に遊びに行く。小学生と直接的に関わるものではないが、ここが小学校のお庭だ、という気持ちを持つことができるようにする。小学生がいない時間に遊ばせてもらい、自分たちで探検をしたりする。途中から小学生の昼休みの時間帯に出会うことができるように、先生同士で打ち合わせをしておく。可能な曜日に行き、ロングプレイタイムに合わせる。後半は小学生と自然に遊びの中で交流することができるようにしている。場所に慣れる、自然に小学生と一緒に遊ぶことができる、という目的で行っている。

幼稚園の中では、小学校の給食を運んできて幼稚園で食べる、ということを行っている。10月頃から月1回のペースで、小学校の栄養士さんと連携をし、話をしてもらい、小学校の食器で食べてみる、という活動が行われている。食を通した接続という部分も子どもたちが経験することができるようにしている。

12月頃から小学校の生活科等を通して、小学生は授業として、幼稚園児は活動として、「あたらしい1年生をむかえよう」、「大きくなったぼく、わたし」という単元を行う。小学生は幼稚園の頃を思い出して、新しく来る子たちがどんなことに不安を抱えているのだろう、どういう手助けができるか、小学校の楽しいところはどこだろう、ということを自分自身の経験を振り返り考えることが大切になる。また、直接新しい1年生に触れあい、お互いに親近感をもって小学校のスタートを切ることができるように行っている。

先生方同士の連携、接続は、幼稚園の後半でどんなことを大事にしていて、小学校の最初にどんなことを大事にしていくか、ということを共有している。幼稚園での後半のカリキュラムをまとめたもの（連携カリキュラム）を小学校の先生方に渡している。

小学校の先生方側からも、スタートカリキュラムの内容の共有が行われている。なかなか内容を一緒に検討をする、ということまではいくことができていないが、こんなことをやっている、という質的な経験レベルの内容のものを渡している。

また、子どもがどのような活動をしたのか。例えばお化け屋敷づくりをした、ドロケイが好きだったなどの活動の一覧と、そこで何を用いたか、使ったかという対象となる教材や道具もの。例えば段ボールとカッターナイフを用いた、というものを一覧表（幼稚園での活動）にして共有をしている。

個々の子どもたちの育ちを旧担任から、小学校の教務主任の先生方にお知らせをしておく。新学期が始まり4月になってから小学校の担任の先生が、幼稚園に来て、一人一人の幼稚園での様子や小学校において配慮が必要なことを具体的に共有している。

質問2：幼稚園教諭になった経験が小学校にもどってからどのように活かされたか？

（回答）幼児理解、一人一人の理解が幼稚園はとても大きい。本当に多様であるため、どんな子がいてもその子に対して、どういう関わりや支援をしたら発達を支えることができるか、もし32人いたら32通りの関わりを行っていくのが幼稚園である。そのスタンスで小学校のクラス運営を行うことができる、ということは強みだと思う。このくらいのことは子どもたちができる、というような幼稚園で任せることができる姿、成長していく姿を知っているため、怖がることなく子どものことを信じることができる。

小学校だと、一番小さいため、6年生が何でもやってくれたりする。上級生にとっていいこともあるので、やめる必要はないが、1年生が自分たちでどういうことができて、どんな手助けが必要である、という理解が幼児期を知っているとわかりやすくなる。例えばお掃除の時間の場所が1年生はわからないため、上級生がお迎えに来てくれる。しかし1年生のクラスの中で、お掃除の場所を探検してこよう、というミッションのような活動を行うといいと考える。それを踏まえて、上級生といかずとも張り切ってお掃除の場所に昼休みに向かうことができるようになる。しかし、前もって行うことや一人ずつ教えておく、という感覚が小学校の先生だと難しい。幼稚園でも大事な、見通しを持つことが小学校の中でも大事にしていくべきだと考える。子どもたちが見通しをもてるような手立てを、幼稚園の先生方は行っているのでそれを小学校でも活かせると思う。

質問3：小学校での経験が幼稚園でどのように活かされたか？

（回答）幼稚園から活かせるものよりも、少ない気がしている。教育は下から積み上げていくものだと思う。幼稚園のことを知っていることで、小学校での経験がより深くなると考えている。しかし、小学校の生活が分かっているから、こういうことで躓くのだろうな、心配になることがあるのだろうな、ということが分かる。一人一人に自信を持たせるような関わりを、前もって意識することができる。

幼児期で大事なことは、いろいろな特性があってそれぞれの個性があって良いが、自分自身が考えて行動をすることに安心感や自信を持つこと、自覚をして進めたりすることである。やらされるのではなく、自分で考えて行動をするということを幼児期からしっかりとできるようにしていくことで、小学校において不安になったら先生に聞く、困ったときにどうするか、自分なりに考えるなどといったことができるようになる。幼稚園での様々な経験が、小学校での自信や行動に現れる。

小学校において、幼稚園時代に遊びきっていない子は大変である。幼稚園では自己発揮し、たくさんの経験ができるよう遊ばせたいと改めて感じた。その経験がないために、休み時間も途中でやめられなかったり、授業中も机の中で工作をしてしまったりしてしまう子たちもいる。例えば、時間を区切って授業の残りの時間に折り紙をする、帰りの会で担任と子どもたちとで素話をつくっていく「お話タイム」をつくるなどといった工夫をし、1日の中で楽しめる時間をつくるようにしていた。

質問4：小学校と幼稚園で異なる点は？

（回答）生活のスタイル、目的や規模が異なる。

小学校は、年齢の大きい子どもたちに向けられていると感じる。5, 6年生の活躍ができる場をつくっていくところがある。枠組みや時間設定、行事予定が、1年生にとっては忙しく、いろいろなものが詰まっていて、全体で行動をしなければいけないことが多々ある。

幼稚園は本当に一人一人のペースで、生活をする

ことができるゆとりがある。友達とけんかをしても、納得がいくまで話し合う時間や空間、対応できる先生などよりよい環境がある。

一方で小学校は、どうしても次の授業があるため、まだ全然気持ちがおさまっていない場合でも授業に参加をしないといけない。一人の子がそこでとどまっていたら、例えば35人学級であったら34人の子供たちが無駄な時間を過ごすことになる。そこに小学校の先生のジレンマがとてもあると思う。担任も一人で対応をしなければならないことが多い。先生は、今は我慢して授業をやろう、と子供に言い聞かせてしまうと思う。しかし、子どもは結局気持ちが落ち着かず、授業に集中することができなかったり、教室から出て行ったりしてしまいがちである。そこが、難しい点であると思う。学年で連携をして、隣の先生に助けを求め、困ったときがあったら先生はちゃんとお話を聞くから、友達のためにその時は待っていようね、という声掛けなどをしていく。

学級経営として、踏み込んで誰が困ったときも、先生が助けるからみんなもこの子のことを助けてあげよう、というものにする。すると、子どもたちに任せていると、一人の話を聴いている間、自分たちできちんと自習をするようになった。無理やり気持ちを切り替える、ということは中々難しい時期は、先生は絶対に話を聞くからこの時間は少し頑張ろうね、というように本人も切り替えが聞くように支援をしたりする。どんなに大きくなっても、問題の内容によっては短時間では、解決することができないものはたくさんある。休み時間を使ってよく話を聞く、ということをする。幼稚園と小学校とでは、生活スタイルや、トイレの場所が遠かったり、階段であったりと空間的なものも異なると感じる。

質問5：小学校を見据えた幼児教育の在り方は？幼児期の子供たちと関わる中で大切なことは？

（回答）幼児期の後半になると、自分の思いを言葉にしていくことや友達の思いを感じることができる経験、見通しをもって生活をすることが大切である。そのことを気にしながら、一人一人が自分らしく生活をしていくことができるように、ということを心掛けていく。そのことで、友達と協力をすることができるようになったり、困った場面の中でアイデアを出し合いながら乗り越えたり、クラスとしての集団意識であったり、頑張ろうという気持ちになったり、小さい子に対して自分がやってあげよう、という感情が芽生え育っていく。幼児期はこれを育てよう、というものではなく総合的に子どもたちが育っていくという点につながっていく。その点を特に、大切にしている。

4．2．稲川知美（附属幼稚園副園長）へのインタビューに係わる考察

稲川知美教諭は、幼児教育では一人一人の理解が必要になってくる、と言う。どんな子がいてもその子に対して、どういう関わりや支援をしたら発達を支えることができるか、もし32人いたら32通りの関わりを行っていくのが幼児教育であるため、その経験を活かして小学校でも個々を大切にした学級経営を行うことができる点が強みだと言う。

質問3に対する回答の中で、「小学校において、幼稚園時代に遊びきっていない子は大変である。幼稚園では自己発揮し、たくさんの経験ができるよう遊ばせたいと改めて感じた。その経験がないために、休み時間も途中でやめられなかったり、授業中も机の中で工作をしてしまったりしてしまう子たちもいる。」と語っていることは重要である。学校教育に係わっている人達の中には、「幼稚園で遊ばせてばかりいると、休み時間とのけじめがつけられなくなる」と考える人は少なくないのではないだろうか。しかし、稲川は、それは逆だという。幼児期に「遊びきっていない」から「休み時間も途中でやめられ」ないというのである。遊びの中でこそ、幼児たちは、「これからまず～をして、次に～をして、そして～を…」という見通しを持つ力を育むことが出来る。この力こそが、小学校に入学して、例えば、「一時間（45分）の授業の中で、まず～をして次に～を…」、あるいは「今日は、二時間目と三時間目の業間に〇〇君と～をしよう」、と子ども自身が見通しを立てる力に直結している。

また、稲川が、「幼稚園時代に遊びきっていない」子どもに対して、「例えば、時間を区切って授業の残りの時間に折り紙をする、帰りの会で担任と子どもたちとで素話をつくっていく『お話タイム』をつくるなどといった工夫をし、1日の中で楽しめる時間をつくるようにしていた」と語っていることも意義深い。「けじめ」がつけられない子どもを一方的に叱るのではなく、授業の残りの時間に折り紙をしたり、帰りの会に「お話しタイム」をつくることで、

子ども自身が小学校の生活の中で見通しを持つ力を育んでいると言える。

学級経営として、誰が困ったときも先生が助けるから、みんなもこの子のことを助けてあげようとする、というお話があった。どんなに大きくなっても、問題の内容によっては短時間では解決することができないものはたくさんある、と言う。子どもの年齢や発達段階に関わらず、小学校にもさまざまな子どもたちがいる。文部科学省が2012年に「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」を明示したように、障害のある子どもと障害のない子どもがともに教育を受ける、インクルーシブ教育も推進されている。幼児教育で求められる、一人一人の子ども理解や個々を大切にする姿勢は、さまざまな子どもたちとの関わり方のヒントになり得ると考える。

また幼稚園教諭の経験の中で、幼児期に子どもたちがどこまで自分でできるのか、知っているため、小学校に上がった子たちのことを信じることができる、と言う。幼児期の遊びの中で、自然と見通しを持って行動する力がついていく。子どもたちが幼児教育の中で見通しを持って活動することは、小学校にもつながっていくと言う。

幼児期で大事なことは、さまざまな特性や個性がある中で、子ども自身が自ら考えて行動をすることに安心感や自信を持つこと、自覚をすることである。やらされるのではなく、自分で考えて行動をするということを幼児期からしっかりとできるようにしていくことで、小学校において不安になったら先生に聞く、困ったときにどうするか、などといったことができるようになる、と言う。幼稚園の様々な経験が、自信や行動に現れる。

小学校と幼稚園は、生活スタイルや目的、規模も異なる、と言う。小学校は行事等の活動の規模やペースを高学年の子どもたちに合わせているのに対して、幼稚園は一人一人に合わせて、個々のペースで遊び、過ごしていくことができるゆとりがあるそうだ。小学校では集団で行動するため、どうしても個々のペースで進めていくことが難しい。学年で連携をすること、隣のクラスの先生に助けを求め、子どもたちが困ったときに先生を頼ることができるようにすることが大事である、と言う。子どもたちが、いわゆる幼児教育との「段差」を乗り越えていくために、先生に頼り、先生と相談し、その上で友達同士で「段差」を乗り越えていく展望がここに示されていると言えるだろう。

5. 長谷部せり（附属幼稚園教諭）に係わるインタビュー内容及び考察

5. 1. インタビュー（2021年6月25日実施）内容

宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園の長谷部せり教諭へのインタビュー内容（質問、回答）は以下の通りである。

質問1：小学校教諭としての経験が、幼稚園教諭になった時にどう活かされたか？

（回答）小学校教諭時代は良い意味で、学級を全体としてみるということを意識していた。それゆえに幼稚園に異動になってからも、個を大切にしながら全体のことも気に掛けるという意識をもつことができた。小学校での勤務経験が、すぐに直結して活かされたことがあるというよりは、幼稚園教諭として働きながら気が付いたことや、気が付かされたことが多いという気がする。しかし，基本的には小学校教諭時代も，幼稚園教諭として働いている今も，教師として大切にしたい信念のようなものは変わらないので，小学校と幼稚園のハード面の違いに驚いたり戸惑ったりすることはあっても，教諭としての自分自身は変わらずに経験を積み重ねていっているような気がしている。

質問2：幼稚園教諭としての経験を、この先小学校教諭になった時にどう活かしたいか？

（回答）幼稚園に異動してきて、これほどまでに一人一人のこと，つまり「個」をよく見ているんだということを実感した。学級集団の中でも、本当に一人一人をしっかりと見て「個」を大切にしていくということを、幼児教育で教わった。また、この先小学校教育に携わることがあったら、一人一人をしっかりと見て個を大切にしているからこそ学級が成り立つ、ということに活かせると考える。これは，個と学級のどちらに重きを置くということではなく，個の集まりが集団になるということを再認識したということである。当たり前のことであるが，幼児教育に携わりそういったことをより実感したということであると思う。小学校教諭時代も、「子ども主体」を大切にしてきたつもりであった。しかし幼児教育に携わるうちに、教師という仕事が、「（教師）教え

ている」、「（子ども）教えられている」という教師から子どもへの一方通行の関係ではなく、こんなに子どもに教えられることがあるのか、という子どもありきのもの、子どもがいるから成り立っているものであるということを学んだ。このことから子どもを主体とした教育、子どもから学ぶということ、学び続けるということを小学校教諭としても大切にしたいと考えている。

質問3：小学校、幼稚園の異なる点は？
（回答）枠があるのとない（あまり枠を作らない）、という点が異なる。例えば、小学校には時間割がある。時間という概念にしても、時間割というものの中で生活をつくっている小学校と、柔軟な時間の中で子どもたちに寄り添いながら時間を組み立てていくことができる幼稚園とは異なる。これは、どちらが良い悪いということではなく、発達段階に応じた上でのことである。また､小学校では教科書があり、「今日はここまで学ばなければならない」というものが大まかにある。幼稚園は遊びを通した総合的な指導であり，環境を通した教育を主としているため「～しなければならない」というよりも、教師が子どもたちの発達段階や経験，個人差,その時期に大切にしたいことなどを踏まえて，それらが子どものどのような学びにつながるかということを含めながら日々の保育を行っているという点が大きな違いであると感じている。

また、言葉かけ一つ、目線一つにしても、子どもの発達段階に応じて行うこと、個を大切にすることが大事である。そのことを、幼稚園に異動した1年目に強く感じた。私は、前年に小学校6年生を担任して、翌年、幼稚園に異動になった。子どもたちを集めたいときに何も考えることなく「集合！」という声掛けをしたが，子どもたちが全く集まってこなかったことを今でも覚えている。声掛けひとつにしても発達段階や子どもとの関係性が重要であるのだと実感した。結局その時は，隣の主任のやり方をよく見て真似した。目線を子どもたちに合わせ、「おあつまりだよ」という身振り付きの声掛けをすると子どもたちが集まってきた。またイスを「ここに移動しよう」という抽象的な声掛けではわからなかったので、「先生と一緒にイスをあそこの窓の前までおひっこしをしよう、いちに、いちに…」というような声掛け（教師も一緒に行動）をした。このようにすることで、幼児期の子どもたちはやらされて動くのではなく､自分たちに必要性があることや､やっていいことがある、面白い、と感じることで自分から行動をするのだな､ということをとても感じたし、いまもなお感じている。

質問4：幼稚園と小学校の中でつながっている点、つながっていない点は？
（回答）育ちや学びに関してはつながっていなければいけないものであると考えているため、つながっていないと言い切ってしまうのは違うと思う。小学校と幼稚園で共有ができていないが故に、という前提で話していく。そこが共有されていれば本来であればつながっているはずである。つながりが分断されている、というものはない。しかし、共有が不十分であるために子どもたちがどこまで意欲的に自分でできるか、という点を小学校という新しい環境や組織、文化といった、新たなコミュニティに入ることで、子どもたちが張り切ってここまでできる、という点がつながらずにもう一度小学校から、本来はできるところも1からになってしまう。例えば給食の配膳も年長児は、同じ分量を配ろうと自分なりに考えながら、人数に合わせて配ることができる、といったことを生活の中で経験している。小学校に行くと、その組織の中の一番下の学年になるので、6年生がお手伝いにきたり、それだけでなくすべてやってあげてしまったりすることがある。できる、できないという点の境目の共有が足りていないゆえに、つながっていないことのもったいなさを感じている。

子どもの育ちや学びは、本来はつながっているはずである。子ども自身の内から湧き出るものは、つながっていると感じている。

質問5：小学校を見据えた幼稚園の遊びや取り組みはあったか？意識していることは？
（回答）附属幼稚園には、教育課程がある。3歳児、4歳児、5歳児がそれぞれの学年でどのような教育活動をして、3年間ないし2年間で修了（就学前）までにどのような育ちや学びをしてほしいのか、という教育課程と照らし合わせて、日々保育活動を展開している。例えば環境設定でも、教材一つにしても、子どもの主体性というものを考えた時に、ただ遊んでいる、というものが主体性ではない。子ども

たちがやりたい、と思うものや、どういうことだろう、という探究や追究したいという気持ちを抱かせるような保育展開になっていると思う。それを考えて、教師は環境をつくっている。

例えば5歳児の遊びの中で、雨どいを用いて水路を作る、といった遊びを子どもがする。上から流すと水を流すと下に向かって落ちていく現象が面白い。それでそれを何度も楽しむ。何度もそれで遊んだ後、次に雨どいを何個もつなげて大きな水路を作りたい、と子どもたちが考えて遊びが展開していく時に、「ここ持っていて」「ここはこっちが高いほうがいいよ（角度を変えながら）」といったように、子ども同士が試行錯誤している会話、言葉でのやりとりが聞こえてくる。それは知的な学びともいえるだろう。子どもたちは、遊びの中で体験や経験を通して多くのことを学んでいる。

雨どいで遊びたい、という思いが突然出てくるわけではない。4歳の時にドングリで転がして遊んだり、ビー玉転がしをしたりして，遊び方はもちろん、使った道具の経験、その時試行錯誤したこと等（失敗したことも成功したこともすべて含め）、それまでの経験がつながって積み重なっている。発達段階にはつながりがある。学びにもつながり、積み重ねがあるだろう。5歳児の遊びや生活の中で、突然小学校に向かう姿を意識しているわけではない。3歳児の時に友達や大好きな先生と一緒にいる安心感や、安定した生活をし、4歳児になった時に多様な素材や道具などの経験をし、イメージを膨らませたり、想像の中で遊んだり、夢中になって遊ぶ、といった3歳児と4歳児の時の様々な遊びの経験で培われた土台がきちんとあったうえで、5歳児の活動につながっていく。これまで経験をしてきたことをもとに、どんな素材を使ったら遊びが面白くなるだろう、素材や道具を選んだり、吟味したりする。このためにはこうしたらいいのかな、と自分で考えたり友達と対話をし、相談をしたり了解し合いながら自分たちで遊びを創っていく。こうして、3歳4歳5歳と学年があがっていく中で，これまでの経験が積み重さなり，それが学びになっていく。つまり，そういった幼児教育での学びが小学校以降の教育の土台になっていくのだと考えている。幼児教育では、幼児期なりの遊びの中にある学びを、大切にしている。つまり遊びが学びであると考えている。こうした幼児期の経験、学びは小学校に活かされていると思う。さらに、一人では学ぶことのできない、集団の中にいるからこそできる、友達と相談や対話をする、といった友達同士の関係性の中での学びも活かされると思う。自分の思いを相手に話す力であったり、伝えたい気持ちになって伝えようとしたり、相手の話を聞いたことで自分自身の刺激になったり、という経験がある。そういった経験も、小学校以降の教科教育になった際にも、活かされると考えている。

質問6：幼児期の経験を活かした小学校の在り方は？

（回答）まずは、幼児期の世界を知る、ということが大切である。幼児期の中でどのようなことを大切にして子どもたちはどんな育ちを得てきているのか、知ることが必要である。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をきっかけにそれらを共有するなど、まずは知ることからはじめて、育ちや学びのつながりを捉え、それらを踏まえていけると良い。また一人一人の育ちを、学級や集団の一人としてではなく、一人の子どもとして「個」をみる、ということも重要であると考える。知らないことには経験を活かすこともできない。だからこそ知ることからはじめる必要がある。それは、小学校の問題ということではない。幼児教育に携わる側もそれを知らせていこう（知ってもらおう）とする意識が必要である。

私自身も、今後小学校にいった時はこういったことを意識して、幼児期の経験を活かした小学校の在り方を考え、実践していきたい。

質問7：幼小接続・連携の課題は？

（回答）お互いの教育を知ることが大事である。お互いのことを知るところから始めて、共有をしていくこと。幼児期の育ちを知ったところで、小学校がどのように指導を工夫していくと良いか、考えていくことが課題である。子どもの学びがつながっているということを意識し，そのつながり、つまり接続の在り方を互いに考えていかなければいけない。

幼稚園側の課題としては、保育の質が挙げられる。保育の質の保障、追求という点が課題である。幼児期の子どもたちの生活・学びの場は，幼稚園、保育園、認定こども園等の施設がある。小学校に入学した際、その集団にはさまざまな園出身の子どもたちがいる。その時に文化が異なることは仕方がないこ

とであろう。しかし、保育の質がある程度保たれていること，つまり，幼児期において大切にしたいことが幼児教育の中できちんと位置づいていることで，子どもたちの接続期の戸惑いは軽減されるであろう。小学校教諭からしてもそうであれば、その後の学びや育ちがつながっていくと思う。幼児教育に携わる先生たちも、幼稚園教育要領等を基に、保育の質を高めていくこと、つまり幼児期の学びの保障をすることが重要である。そうすることで幼小の円滑な接続にもつながると考える。これは，小学校での教育を早期教育として幼児期に行うということではない。幼児期に大切にしたいこと，体験、経験からの学び、遊びの中で学ぶことを十分にすることが小学校教育の土台になるということである。

また、市町村単位で幼小連携に対する差があるような現実もある。自治体レベルで差がある現状がある。それも課題の一つであると考えるが､幼小連携･接続をどのようにしていくと良いのかを、それぞれがしっかり考えることで、どの地域も差がなく、幼小連携・接続がされていくと良い。そうすることで子どもたちの学びは地域など関係なく幼児期から学童期へつながっていくであろう。そうなることを期待したい。

質問8：幼小接続・連携の望ましい在りかたは？
（回答）お互いを知る、共有しあうという点を、具体的に実現していくためにどうしたら良いのか、双方が考えることができることだと思う。小学校教諭が保育を参観したり、幼稚園教諭が授業を参観したりする場があること。そこで感じたことを、お互いに伝え合うといった、対話の場を作ることができたら、少しずつでも望ましい関係になることができると考える。

幼小連携や接続の大切にしたいところを、双方の教師が同じ認識としてもつことができるようになることが、望ましい幼小連携や接続の在り方の一歩であると思う。

小学校教諭であろうが、幼稚園教諭であろうが、子どもを「教師」という立場としてみていくことにはまったく変わりないため、子どもたちの育ちや学びはつながっているという意識を教師自身がもつことが大切である。教師が「(子どもを）〇〇させる」という見方ではなく、目の前の子どもの姿を大切にして、子どもの姿からつないでいくことができると良いと考える。

5．2．長谷部せり（附属幼稚園教諭）へのインタビューに係わる考察

長谷部教諭は、小学校と幼稚園において子どもの育ちや学びは、本来はつながっているはずであり、子ども自身の内から湧き出るものは、つながっている、と言う。しかし小学校と幼稚園で共有がうまくされていない故に、子どもたちが幼稚園から小学校という新しいコミュニティに入ったときに、子どもたちが張り切ってここまでできる、という点がつながらずにもう一度小学校から、本来はできるところも１からになってしまうと考えているという。

また長谷部は､幼児教育の課題として､｢保育の質｣が保障されるべきことを挙げていた。

幼小の「縦」の関係において、子どもの育ちと学びの共有がいまだ充分には行われていないこと。多様な幼児教育機関の「横」の関係において、「保育の質」がいまだ充分に保たれていないこと。長谷部が指摘するこれら二つの課題には、共通する問題が潜んでいるように思われる。それは即ち、教育観の問題である｡小学校教育は､幼児教育に比べれば､｢教師が教えなければ、子どもは学ぶことが出来ない｣、という教育観が強い。生活のルールであれ、教科の学習内容であれ、「教師が教えなければ子どもは学ぶことが出来ない」、という教育観である。幼小における、育ちと学びを共有する難しさの本質にはこの教育観の違いがあると思われる。

また、この教育観の違いは、多様な幼児教育機関の「横」の関係にもあると思われる。小学校教育とほぼ同様に、教師が教えなければ幼児は学ぶことはできない、という教育観に近い幼児教育もあるのではないだろうか。

それでは、私たちは、こうした教育観の違いを、どのように乗り越えていくことができるのだろうか｡その答えは､質問8に対する長谷部の答えにある。

「お互いを知る、共有しあうという点を、具体的に実現していくためにどうしたら良いのか、双方が考えることができることだと思う。小学校教諭が保育を参観したり、幼稚園教諭が授業を参観したりする場があること。そこで感じたことを、お互いに伝え合うといった、対話の場を作ることができたら、少しずつでも望ましい関係になることができると考える。」

幼小という「縦」の関係においても、多様な幼児教育機関という「横」の関係においても、授業や遊びにおける子どもの学びの事実をふまえて、「なぜ、子ども（幼児）の、このような姿を尊重することが大切なのか」「こうした経験がどのような成長につながるのか」等の対話をしていくことが互いの教育観をよりゆたかにしていくと思われる。

小学校教育、幼児教育それぞれの違いはもちろん尊重されるべきである。また、多様な幼児教育機関のそれぞれの違いも、もちろん尊重されるべきである。しかし、これからの社会を生きていくために、例えば「粘り強さ」や「自立的な学び手であること」が求められるとしたら、どのような教育ならそれを育むことが出来るのかを、「違い」を尊重しながら、対話していくことが求められている。長谷部の語りが訴えているのはこのことであると思われる。

6. おわりにかえて：「その子らしさ」を育む

上に、現在の社会では「粘り強さ」や「自立的な学び手であること」が求められる…、と書いたが、実はこのように書くことにも違和感がある。その違和感とは、「粘り強さ」や「自立的な学び手」を育てることが自己目的化してしまうと、幼児教育が大切にしてきた「その子らしさ」を育む、ということがおろそかになってしまうのではないか、という恐れでもある。

インタビューを受けた一人一人は、共通して、「（幼児）一人一人をよく見て、一人一人を大切にしていく」ことをくり返し語っていた。そこにあるのは、社会の側がどのような資質（粘り強さ、自立的な学び手等）を求めていても、より尊重されるべきは一人一人の「その子らしさ」にある、という想いではないだろうか。もっと言えば、「その子らしさ」「その人らしさ」が真に発揮されることが、その子（人）にとっての幸福であり、また「その子（人）らしさ」の発揮こそが、真にゆたかな社会を創っていくのではないか、という想いであると思われる。「その子らしさ」の尊重こそが、子ども自身が自らの個性を見つめ、個性を集団（社会）の中でどう生かそうかと考える基盤となり、また自身の個性を尊重されることが、他者の個性を尊重する、という人格の道徳的な基盤を形成していくと思われる。

平成29年に改訂された幼稚園教育要領の「前文」の一部を以下に掲げる。

「…これからの幼稚園には，学校教育の始まりとして，……一人一人の幼児が，将来，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる。…（『幼稚園教育要領』平成29年3月告示）」

上の前文は、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校（幼・小・中・高等部）のそれぞれの学習指導要領の前文と同一のものである。ただ、「幼稚園」が「小学校」等の言葉に替えられ、「幼児」が「児童」あるいは「生徒」に替えられているだけである。このように、指導要領・前文において、一人一人が、幼小中高を通して、「その子らしさ」が尊重され、「その子らしさ」を発揮していくことで、他者を尊重し、他者と協働して新たな社会を創造していくことが謳われていると言える。つまり、幼児教育における教師の「一人一人を大切にしていく」という想いは、実は小中高の学習指導要領を貫く目的として謳われていると言えるだろう。

さらに言えば、幼児教育における「一人一人を大切にする」という想いと理念は、2021年に公表された「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」の中で提起された「学習の個性化」を軸とする「個別最適な学び」と「協働的な学び」という二つの関係的な学びの概念に直接引き継がれていると言えるだろう。

ところでまた、「縦」の関係（幼小、小中、等）においても、「横」の関係（幼幼、幼保、小小、等）においても、異なる個性を持つ人（教員）同士がすぐに教育観を共有できるわけではないだろう。まさに、その意味で、「対話」が求められている。本稿を読んでいただく一つの意義は、一人一人の教師の経験の場から語り出された言葉と読者が対話することが出来るということである。是非、本稿の読者一人一人が、「その子らしさ」「一人一人」を大切にする「幼児教育」及び「幼小接続・連携」との対話を続けていくことの大きな意味を感じとっていただければ幸いである。

参考文献

文部科学省（2012）.「共生社会の形成に向けたイ

ンクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」
文部科学省（2017）．幼稚園教育要領
文部科学省（2021）．「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」

令和４年４月１日 受理

Interviews about the Connecting between Child education and Elementary education

Yuki NAKAI, Seri HASEBE, Tomomi INAGAWA, Noriko SUZUKI,
Nobutomo TAKANEZAWA, Hiroshi AOYAGI